思ひ出すままに

山本安英

医者をしてゐた父が、ふだん謹厳であるのに藝事が好きで、ことに義太夫はお出入りの女の師匠がゐたり、何かの時には自分も肩衣をつけて落語の「寢床」を地で行かうといふありさまだつたものですから、私も有名なさわりのいくつかを、知らないうちに覚えてしまひました。その頃父の買つた、古い太夫さんのレコードも、今は貴重な品となつて、まだ何枚か残つてゐます。當時私が正式に習はされてゐたのは長唄だけでしたが、このやうなことから義太夫の節廻しと感覚とが、私の幼い耳に自然と残されてあつたことを、今になつて私は大変ありがたいことに思つてゐます。

文樂座との御縁は、空襲前の四ツ橋のあの建物の、もう一つ前の代になると思ふのですが、私達の芝居をあの小屋でさせて頂いたことが二度ありました。一度は脚色された廬花の「灰燼」その他を持つて行つた時、もう一度は「ハムレット」の時でした。二度目の時でしたか、私は樂屋でその頃の古靱さんのお部屋といふのを當てがはれ、端正に片づけられたその御部屋の空氣に何か氣の引きしまる思ひでおしろいを溶いたりしたのを覚えてゐます。廊下でしたかほかの御部屋でしたか、夕方の薄ぐらい壁ぎわに、人形のかしらや手や足がずらずらと掛け並べてあるのを見た時のあやしい印象を忘れることができません。

たぶんその前後のことだつたと思ひますが、これが本場の人形芝居なのだと思ひながら、その小屋での上演を拜見した記憶も残つてゐます。

しかし私が本當に文樂を樂しみにするやうになつたのは、その後新橋演舞場に、たびたび上京公演をされるやうになつてからのことです。ひと頃藝談や研究や、書物の方でも文樂関係が盛んに出版されたあの當時は、私もやはり手に入るだけは読みあさつ

て、そして演舞場へも出來るだけ通つたものでした。その頃、文五郎さんと紋十郎さんが、清元や新内で人形をつかはれる試みをされてゐたやうですが、このお二方がある日岡本文彌さんのお宅で打ち合せをされるところを私は偶然拜見しました。名古屋にゐられてもう亡くなられた名人の春太夫さん、劇作家の木下順二さんなども來てゐられました。宮染さんが御老体に節の狂ひもなく日高川の一段を語られ、そして打合せを済まされたあとで、文五郎さんから、後に出版された藝談にあるやうなお話のいくつかを伺つたりもしました。

近年私は、本當に感動するといふ体驗の非常に少いことを淋しく思ふのですが、この何年かのうちに感動した思ひ出をさがせば、まづ最初に浮んで來るものは、昭和十八年頃でしたでせうか、九段にある當時の軍人会館で文五郎さんと紋十郎さんの出された二人八重垣姫です。戰爭の最中、不愉快にしめつけられるやうなそして一方ざわざわした空氣が充滿してゐたあの日日の中で、他愛もないと云つてしまへば実に他愛のないあの十種香の物語りを踊る人形の舞臺から、あれだけの恍惚境と深い感動とを與へられた記憶は、実に貴重なものとして忘れることができません。

昨年でしたか、久しぶりに上京された文樂の舞臺を初めて見た新劇の若い俳優さんが、ふいに涙のあふれて來るのを押へ切れない瞬間のあつたことを、半ば不思議さうに白狀してゐました。その不思議さこそが貴重なのだと思ひながら、私もかつての感動がつと胸もとにこみ上げて來るのを覚えました。さういふものを、私たちは私たちなりに、新劇の世界に生み出して行かねばならないことを切に感じます。

(五頁よりの續き)場の一つさへない日本の現狀を思ふと、いつになつたら日本にほんたうの文化が榮えるかと淋しい氣がする。

同時にまた劇そのものも、一部の人の觀賞するものであつてはならず、國民のなかに深く喰ひ入つてゆく必要がある。それでなければ、劇の發展はありえないと思ふ。(京大教授・文博)